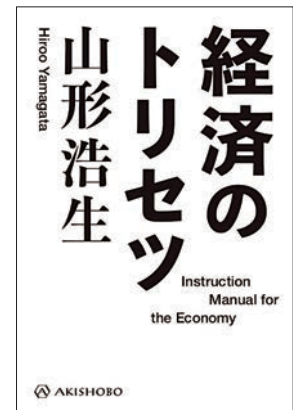


『経済のトリセツ』

山形 浩生 著

食料領域 研究員 丸山 優樹



『経済のトリセツ』
著者／山形浩生
出版年／2021年
発行所／垂紀書房

みなさんは、ポール・クルーグマンという経済学者を御存じでしょうか？彼は、貿易理論や経済地理学などの分野を大きく発展させた功績が認められ、2008年にノーベル経済学賞を受賞しています。そのような大経済学者に魅了されたのが、本書の著者である山形浩生氏です。

山形氏は、開発コンサルタントとして、発展途上国の開発援助に携わる中で「経済成長とは？」「生産性はどのように向上するのか？」という疑問を抱くようになりました。そして、勤め先の留学制度を活用して、マサチューセッツ工科大学の修士課程に通う中、偶然本屋で手に取った『クルーグマン教授の経済入門』（原題：The Age of Diminished Expectation）を読み進めるうちに、クルーグマンの経済理論に目を奪われ、彼の著書や論文を読みあさった経緯を持ちます。

現在、山形氏は経済書の翻訳を多数手がけるだけでなく、評論家としても活躍しており、雑誌記事や自身のブログを通して時事問題や日本の経済政策について論じています。本書は、それらの内容を4部構成でまとめたものです。紙面の都合上、各章の内容を簡単に紹介しますと、第1章は経済について議論する上での基礎用語の確認に当たる章となっており、生産性や経済成長、所得などの用語について、開発コンサルタントとして経験も踏まえながら解説されています。第2章では、クルーグマンの業績の一つである不況の経済学に関する研究に着目し、彼の著作及びその基礎となっているJ.M.ケインズの著作についても解説を行っています。第3章では、前章での解説を踏まえ、日本の景気回復に向けたリフレーション（リフレ）政策の現状と課題についてまとめています。また、少し横道にそれるものの、世界的な注目を集めたトマ・ピケティ著『21世紀の資本』（原題：Le Capital au XXI^e siècle）についても訳者として解説を加え、世界的な格差問題についても紹介しています。最後の第4章は、著者が「落穂拾いの」と表現するように、ギリシャ危機やブレグジット、人工知能など多岐にわたる時事問題について評論家としての意見をまとめ、読者に対する話題提

供の場となっています。

その中でも著者の本書にかけた熱意が感じられるのは、やはりクルーグマンが手掛けた

不況の経済学について論じ、さらにその理論に立脚したリフレ政策が日本の長きにわたる経済不況を打破するカギであると訴えた第2章と第3章です。

クルーグマンの手掛けた不況の経済学に関する研究の功績の一つが「流動性の罠」の存在を明らかにしたことであると著者は述べています。「流動性の罠」とは、金利が引き下げられても経済の停滞や不透明感から、人々が現金をため込んでしまい、景気刺激策として金利の引き下げがこれ以上不可能な状態を意味するもので、まさに現在の日本経済を表しています。そこで著者は、クルーグマンの主張をもとに、中央銀行（日本銀行）による積極的な貨幣発行を一時的ではなく長期的に実施し、人々のインフレ期待を高め、貯蓄意識をそいでいく（「流動性の罠」から脱却する）必要があると解説しています。さらに、同時並行的に公共事業などを通じた財政出動を増やし、景気の下支えを行う必要性も訴えています。

後半の第3章では、2012年に第二次安倍政権が発足して以降のリフレ政策について称賛する一方で、日本銀行が定めた2%のインフレ目標をいまだに達成できていない点を踏まえ、消費増税の問題やより大規模な金融緩和と財政出動の必要性についても意見を述べています。

最後に、本書ではクルーグマンやJ.M.ケインズに関する複数の著作に加え、700ページにもおよぶトマ・ピケティの超大作『21世紀の資本』についても解説が加えられています。専門書には難解な部分も多く、読み進めるのが困難な場合もあります。そのため本書は、彼らの経済理論の大枠を理解し、日本の経済政策に関する議論を深める足掛かりとなる一冊です。著者の少し荒々しい文体に読みにくさを感じる方もいるかもしれませんが、是非手に取ってみたいはいかがでしょうか？